



藤原上ノ原の旧入会地で
四十年ぶりに復活した火入れ
古老の知恵を学び
稀少な茅場の再生を図りたい
町の風物詩になればいい
十二様の見守るなか
快晴無風のこの日
関係者の思いがひとつとなった
情熱、苦勞、心配、そして喜び

藤原で40年ぶりに復活

火入れ

野ん火はおつかねえから
十二様にお祈りしてからじゃねえと
えれえことになるよ
どうしてもやりてえつつうなら
やったっていいけど
ほんとにやるんかい？

四月十八日(日)、藤原上ノ原の町有地で火入れ(野焼き)が行われました。四十年ぶりの火入れを実現したのは、この場を拠点とし、里山景観の維持保全などを目的に活動している東京の市民団体「森林塾青水」のみなさんの情熱と、地元住民のみなさんの協力でした。火入れを行わなくなつてから四十年、山火事のメッカとなつてしまつたこの場所しさを知つている地元住民にとつてはとんでもない「ばかつ話」。藤原が好き

でたまらない、藤原を訪れ、これまで森林探索など様々な活動を展開してきた「森林塾青水」の頼みでも、今回はやはりそう簡単にはいかない。今回、火入れに至るまでの苦勞話などを町の担当者、木村伸介さんと塾長の清水英毅さんにお聞きしました。

(記事/町民室 高橋)

NYUの始まり

昨年の今頃、森林塾青水(本部・東京都新宿区、塾長・清水英毅さん)が上ノ原町有地(旧入会地・21ヘクタール)を借り受け、この土地を利用してどのような活動ができるのか、様々な知恵を身につけようと、塾生二十人を引き連れ、藤原の古老から話を聞いているときでした。

「昔は火を入れたもんだ。」林親男さん(藤原)の言つたこの一言、この言葉聞いたとき、すでに清水塾長の頭の中は「やりたい。復活させたい。」という想いで一杯でした。

その後塾は、数回の聞き取りを行い、そのたびに「火入れして、良い茅を育てたい。」と話を持ち出しましたが、山火事の恐ろしさを知っている藤原の古老は、決して首を縦に振りませんでした。

しかし、塾の情熱は収まらず、気落ちちは高まるばかり、何度も交渉を重ねているうちに、塾の活動内容やその目的、塾生の人柄を知つてもらおうとする熱心な姿勢を感じ、藤原の古老は、ついに「やってみるか?」という一言を発することになりました。しかし、本当に実現するかどうか、期待よりも不安の方が大きかつたことでしょう。

隣地の理解と除雪作業

火入れを行うには、行政手続きが必要。町の「火入れに関する条例」に基づき申請を行い、条件をクリアすれば許可は下ります。問題は、隣地の承諾が得られるかどうかでした。

関係者は、承諾を得るため隣地の方々にお願ひに伺いました。不安はありましたが、隣地でゴルフ場の施設を管理する榎コクドの雲越支配人から、今回の火入れに関し英断にて承諾いただいたことをきっかけに、他の隣地所有者、武尊山観光開発、手小屋共有林組合にも快諾いただきました。

現実的になつてきた「火入れ」、どうしても気になるのは山火事のこと。残雪を利用して防火帯を作つてはどうか、という話が浮上りました。

また三月、雪深い藤原、多少無謀とも思えるこの計画に賛同し、除雪作業を引



除雪作業をする 雲越萬枝さん(右)・中島利根雄さん(左)



当日茅場に集まった関係者 いよいよ火入れの時です

火入れ当日

き受けてくれたのは、地元でブルドーザーを所有する、雲越萬枝さんと中島利根雄さんでした。しかしこの時期、まだまだかき入れ時、降雪もあり日常生活での雪との闘いも続いています。なかなか作業は進まず、関係者には焦りの表情が見られました。

しかし、一度仕事を引き受けたプロフェッショナル、火入れ予定日の六日前に除雪作業を終了し、雪を寄せ集めた防火帯が完成しました。あとは、火入れする茅場が乾くのを待つだけです。

連日の晴天に恵まれ、茅場はしつかり乾きました。この日、藤原中区長の月岡さんを始め、火入れを知っている古老を含めた約三十名の地元の方々が集まってくれました。塾生は二十名、いよいよ火を入れる時です。

火入れを終えて

午前十時三十分、快晴、何よりも心配だった風は全くありませんでした。松葉に付けられた種火から、清水塾長と地元の古老、雲越萬枝さん、雲越良昭さん、阿部惣一郎さんの手により茅に点火されました。

茅はパチパチと音を立て、見る間に炎が燃え上がり、関係者からワァーという歓声が沸き上がりました。雪の防火帯で囲まれた約一ヘクタールの茅場、燃え広がった炎は、約三十分で真っ黒い灰へと姿を変えました。

『入会地』、地元の住民が共同で管理し、屋根をふき替えるための茅を刈り入れたり、薪を拾ったり、山菜を採ったりとひと昔前までは、生活と切り離せないなじみのある言葉でした。

時代の流れとともにそんな生活が一変し、自然と薄れていった習慣、しかし今回、森林塾青水のみなさんの情熱と地元古老の協力を得て、見事に復活を遂げ、大成功のうちに、無事終えることができました。

しかし、森林塾青水の塾長・清水さんは、こんな反省点をあげています。

林好一さん（藤原）に言われ、大切なことを忘れていたことに気が付きました。火入れの許可が下りた日から当日まで、山の神「十二様」と雨水を司る神「おかみ」に、当日の快晴無風を祈り続けていたのに、火入れが成功した瞬間、塾が大切にしている「大自然の恵みに対する感謝の気持ちと豊作、安全の祈り」

を忘れてしまっていました。五月に予定している「山の口開け」では、地元のみなさんに習い、武尊の山に合掌することから始めたいです。

山の口開け・清掃活動

火入れから一ヶ月、真っ黒な灰で覆われていた茅場に、太くて元気な新芽が顔を出し始め、山々は清々しいもえぎ色となった五月十六日（土）、町のグリーンツーリズム戦略検討委員会の報告会と併せて、塾の主催する「山の口開け」と茅場の清掃活動が行われました。

午後十二時、町のグリーンツーリズム戦略検討委員に委嘱されている森林塾青水の方々から、腰越町長に対し、現在までの活動内容が報告され、町長からはお礼の言葉と今後の活動に対する激励の言葉が贈られました。午後一時、塾関係者と地元住民や町の若い母子連れの方々が



「山の口開け」行事で会話する 清水塾長(左)と腰越町長(右)

六十名の参加者は、本格的な茅場での活動を前に、山の神「十二様」に合掌し、今年一年間、山での安全を祈願する「山の口開け」行事を行いました。

その後、山菜採りなどで山に入った人たちが残した、大量のごみを拾い、活動の拠点となる「聖なる大地」を真っさらにし、多くの恵みを生み出してくれる大自然への感謝の気持ちを新たにしました。

藤原を愛し、幾度となくこの場所へ足を運んでくれる森林塾青水のみなさん、そして快く受け入れてくれる地元のみなさん、行事を円滑に進めるために調整を行う行政、こうした立場の違った団体が相互に理解を深め、協力しあうことで、大自然を活かした実りある行事が行われることは、大変意義深いことではないでしょうか。

当地のすばらしさを発見し、積極的に活動している森林塾青水の方々に感謝し、今後の活動を期待して止みません。

森林塾 青水(せいすい)の紹介

■活動の趣旨

森に学び、森に憩い、森に感謝する。先人が森との関わりを通じて培って来た知恵を見直し、継承しつつ現代に活かしていきます。合い言葉は「飲水思源」、文字通り水を飲めば源を思うべしということです。

■活動内容

- ①森の自然、歴史、文化の調査、研究、及びその保全と活用
- ②森が育む水系と流域の里山景観の保全と活用
- ③入会慣行を発展させた、新時代の“里山の掟”づくり ほか

■お問い合わせ

東京事務所 新宿区西新宿1-23-7 Tel:03-3345-1390
 水上事務所 水上町阿能川387-1 Tel:0278-72-6250
 URL:<http://www.fiberbit.net/user/sinrinjyuku/>
 E-mail:sinrinjyuku@fiberbit.net